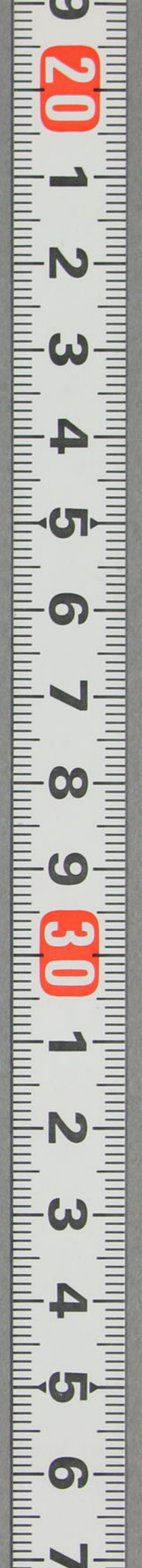


真角叢句集
上

春夏之部

卷二

5
2183
1



利
2/183
1-2

其角叢

句集

附十代
句集

明治十六年
五月補刻

文玉圃梓



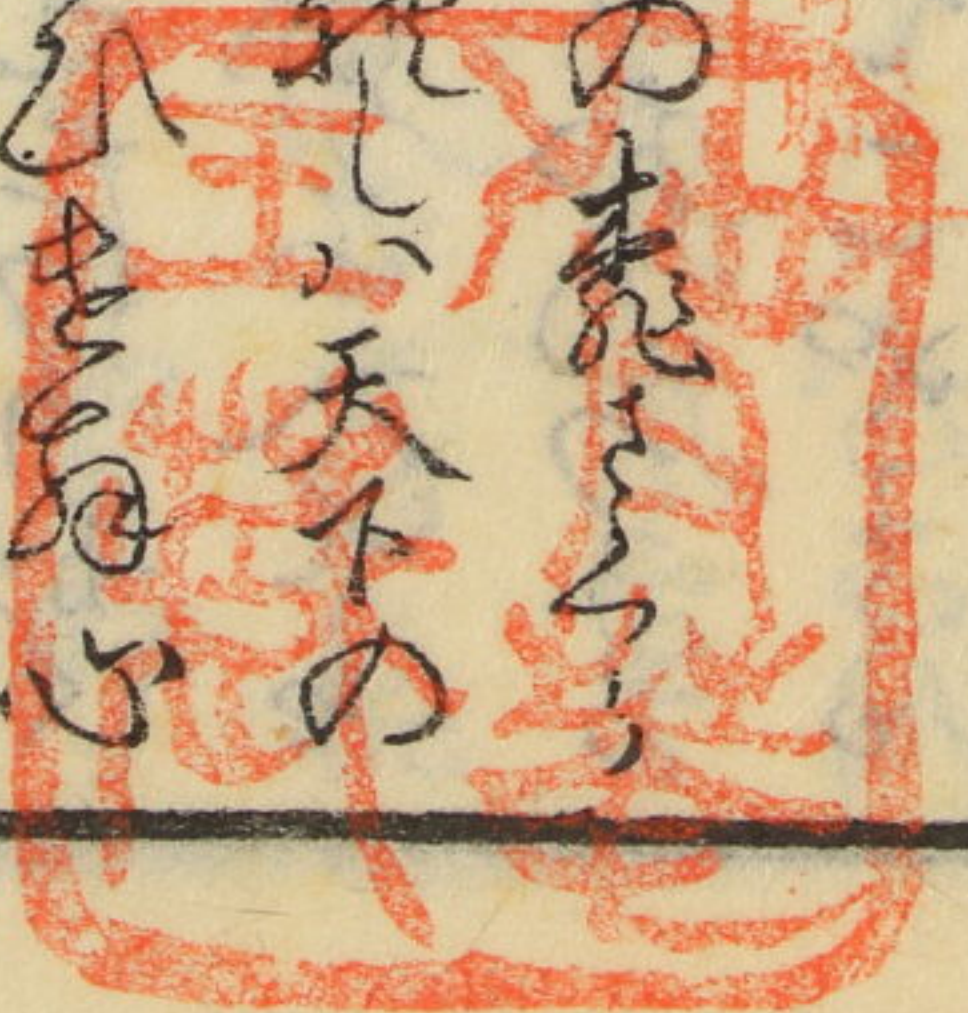
其



明治十六年四月廿日
其角 漸 氏奇



其角と嵐雪とを菴中の素より
知りし蕉翁の称し中より天下の
桃李として公門に在るの心を
いへる也一の礼を此より一雖亦
名家ありて世人も人丸赤人かやう亦
知らしたまはしと此中ありといふは勝
劣の言をいふは是阿とて海括して



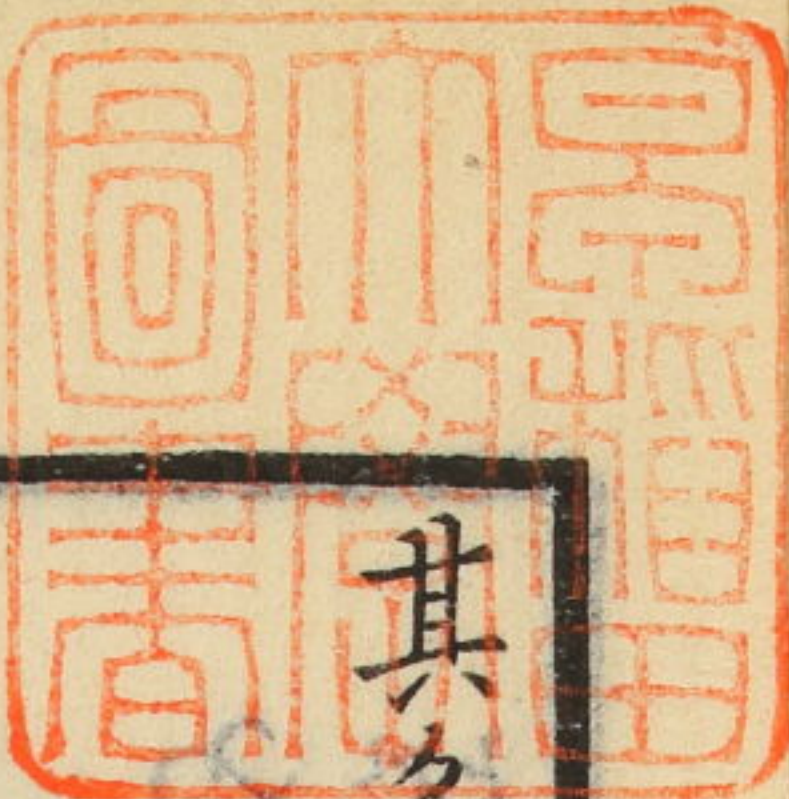
嵐雪ハ風雅子禪味哉のこく無門乃
昇も清もたれり中形く世理能おそあそひ
子里拙劣此筆性あ業晋子、志学の
年とる重功もつとる事はらから計の既ハ
既子次韻の作者才ゆれさ進たりかく
執昔古の心あつまう人に酔郷亦入んを
いよく音結大哉おや強あそあ乃つと
松の尾形神志助何家やこやとも

人哉以女をまひしとらんしやうに入のあひ
おとよ海に妙まや至れさ氣、嵐雪と
下にいれむ事つあくとちん何る人よ羽も依
此れ宣家卿ありと賞言しとさやう形
中ハ此人亦及くはと衣来もぬの川きぬ
すんく潤達能中尔ほそとありて句と
み形自在とほくとり誰の人と世子歌とる
その何とせや此と強句集紙板子刺した

懐子の書に計に...
志して学者に便あり...
串の...
細を...
ら子百尺...
随齋成美序

随齋成美序

序二



其角叢句集

春之部

藤野源氏遺愛之記

坂富久威考訂

日の暮し...
鏡ひ...
霍さ...
題黄金
目...
世の中...
松...
伊勢...
家...
人...
誰

志々々〜記友子

こぢいりも女房のせんあゝ祝ひ
あゝあゝ松し魚のをささし涼しさを

福祿壽の賛

長きのにや年終ほし我の氣は清
く山愛や額平あつる扇と季
室引所地牛の角をたたく也

宝引の後

保昌うらうらひくおを胸あきら
衆鼠入腰乃多とひきいて

上二

引つ連く松とくらくお鹿のま

大根画讃

兵せんおのくゆり子れう那
松あ休やまのさくはあはぬく
若さあそ告る尾上の番あろし
帯もぬそ神代あ〜は〜踏歌宴
軽子帯かき〜り帳乃三枚目

十一日

お汁子を還塚楽能たのを式
大黒後越い〜あやと〜持送〜

春神子持さん口ぬく小櫃の那
漸覚春相泣との切句

削の巻 膏茶ゆり此鼻子海れ
景清、此帯のえきぬや二斗
百人さん 雪かきの志の一暮あり
さうしつもの龍糸白くおたの那成
七種やゆぬ子 聲のまじり
あくまゆ臨月うろく 朝あさ
さうしつひれ七種打身 雲の
沙粒さん 水菜のまじり 初め菜

二人静力かきをも乃り

なつて我扇あつ川波をたてふ
うろこ花妻らふ里の朝の菜
畠うろこ巾あつたりいれ菜搦
傘持をつくとひあれし 若菜比
長唄の記をおひひきく
おもしろくらんをむけし菜搦れ
菜つららの 白魚或吉野川投とみり
河州ハ尾娘を志り
うろこひやうつの子笑る 若菜比

溪邊雙白鷺

はらばら 芥子梳る あつきのきこう那

萬葉集よりも朱雀の柳と作り

あつきのきこう那

たつこく西の禿げをあらはるるを

正月廿日冠里公未傳を

葉刻の上手を握る 蕨の香

新三十三間堂

あつきのきこう那あつきのきこう那木綿賣

あつきのきこう那あつきのきこう那あつきのきこう那

春枕のかるく能者のものとほら守

あつきのきこう那あつきのきこう那あつきのきこう那

四十の賀しあつきのきこう那

は秘蔵の墨とあつきのきこう那あつきのきこう那

あつきのきこう那あつきのきこう那あつきのきこう那

あつきのきこう那あつきのきこう那あつきのきこう那

小窓にうわしあつきのきこう那あつきのきこう那

あつきのきこう那あつきのきこう那あつきのきこう那

梅のふとあつきのきこう那あつきのきこう那あつきのきこう那

あつきのきこう那あつきのきこう那あつきのきこう那

等鶴あはさる
やまねかきもさうちのあしは梅の神
百八のうひく運つたやうきあう先
進上平園哉あゆまやうめれを
あつさりと風をいもむあは梅
様をきれたよ
古くくうめをり入まかひあ子相
不曲亭
あせびの目あはも梅の白ひ代
腕押のうれあはくは素あはれ

三日月の命あはれ
乙禄十四年二月廿五日聖廟八百齡御年
忌於電戸法社詩歌連俳令真行一坐
梅松やあはむか教もは百所
筈木のあはれは是子うめれは先
和心水推敲之句
たぐ時さき日月さうり素あは門
白玉改名
ふさの間の障子やうきと星
梅津硯水と子

を中しと梅ほくろふぬ 六家申
宰府奉納
守妻の所をいりし法あり 跡好愛
元日志珠管あはくし人志句を祝
とらふ中
夜光うう光孔つあこや 貝の玉
小袖あをく 付める人梅三法
仙石を改中履正う五日すみうり孫
玉葉とるは梅中上信ふく
介様あくと手向のくぬ 拜とるり

五
し

久松肅山亭あく
梅くましく 愛宕の星孔くあひ哉
梅津氏の祖又大坂表乃軍功ふり
帝感状 清太刀を以て戴きく 正月十七
日の物くく如上杉峰頂賀ホの家臣十七
と地家の風おはくくくも正月十七日鏡
田の興切あり其栗家督執權くく
けまは賀會あり
幡持張 文其基 服や くと光孔く
宿せんくぬ 擬いりくありまきく

芭蕉翁百ヶ日懐舊

墨のうたえまやむしりし昔うた
氷肌玉骨しりあや

まじしみしきうの香にも梅は皮
うらみのなをそ逆りしうらみ
雪こくくまのたもあゆ 杉 鏡

色蕉を尾をとくく

字之化まや十日ていよおちのうた
あしりたあゆ
雪は子六子娘うけ申三かき

字多の飛原牙つ強歩のよひまあふ
うらみまはれ 曉なましりく
雪の市 甘菜をく かんたのあや

市隅

舟とんえく 寫来く 中竹席落
うらみまやあ氣らりゆく 園花を

茶臼よやうらみ画子

雪やこあしおひつ朝日山
柔板ふとまうたふ画子
うらみの曲く枝と 削きん

管うねく 笛ふきあこを 無 鼈
うらなすや 幸い海幸うら礼あふ
字うまひあふ長刀あふ家あまきし武

柳上鷺の景年

さこのたつる子鷺。おれん。柳うま
まうれるを海幸く幸いぬやれま
地牛豆このし海あま 本あか
凡ゆる子まふるうら家なす武

傾城の讚

青柳乃 歌重 柳や 三り能月

青柳乃 蝙蝠 了ふ 夕くし也
物めら 鼓ゆ ころん 暮もあ
探干や 柳せん 曲 後 後 組

山更上京

貫山もわあひく 柳を 柳うれ
傾城の賢なるあふあの本柳あふ

しきあふまを

鏡 弦とれ 琴うやうの 柳 哉

芭蕉の自画十二懐周之讚

海の防あふ十年志しし 柳 哉

正月巳巳布施願財天へ詣侍奉納
玉櫃を登りてふんふんや 布施のりり
糸魚如漁舟の園有りあひるあふら
志く志の習有り河のふら雪を花うれ

白し魚雨露命

月とは和生雪魚雲 朧 劇

あつらぬの色をいふの川く
白魚と海苔の味 買取り
水何れもあつらぬ味
水のみすすんや

一升ハ一のま海より 規あり
不却の海を 洪如 じきい規
弱きや 小磯 舟も吹たてす

四睡圖

かきろろあし寐くも 靴く如虎の耳
鼻有りありぬ目鏡や おふあり月
點印半面美人の字を彫て琴形の
中不備く我はあて冠里こそ
万句は内卷子押込め侍るわとし
妻は月琴もあつらぬ

お玉河くそ松せん馬さし月東の如
二月十七日原驛

富士の朧都乃太夫 又く巻ん
沾徒岩塚子逗留しく銭あは

白ちのこいと根らうすはしり
松山島や志乃かきおもも此はんく

不二の孫子のたまれ侍り
三帆舟ハ培尻牙す家かきさ矢式

ぬのぬりあらしゆり
孫くそこの蚕やしあひ日向の菊

上
十

てらるゝめや桑の香子 醵ふし尾張
春雨やのしんものあを枯つし

綱く志く 狸の鳴きん 鳥あしの那
この雨見あらしあらん日次る

本多総持云ぬ
昔のあや子津の殺せん 多しんり

遠遊酔帰のかるあらしあ
さるあよふ女くちあむをめ式

三河小酒井村観音寺納
あらし輪や 鼻もあらし 春日 朝

伶人其門ありしや、
悼後志 物言を女へ

昔のなまの音三井と
了のへく世をとくこの子春

画續

浦島、たりの善の
たのありや、大神の
鳥鶴や、ての事は
そよありし、猿牙
苗代や、壁のい

格枝繪る合子

あゝ、斯冬虫、あゝ、
稲荷山

禁固破りと暇と玉丸

破や、又みく、以銀
や、あ入や、そのれ
敷い、星、あ、
や、あ、り、や、
あ、入、や、牛、
故、未、穂、主、
大、石、内、蔵、之、助、

亡君之讎今茲二月四日官裁下令
 一時伏刃齋屍万世のさ人ほり黄舌
 我ひくものや肺肝とつめく
 うらみ守ふけかひし酔ハなまこ火
 画讚
 拾得の風巾よりくせや玉帯
 うら志やい戸ををれまぬ風巾
 支考々遠遊のちり涙きし
 きり
 白河の關をへんまきこののぬき

惜春

梅をくせよまきと箕子さん風巾
 まくせん符法守らんよ雪の如
 歎懐のく移る鄙の居返回
 一松を西子を送る人平
 わくはくやまをぬぬ水 十しとを
 杉起く 畠茂みきとふ雪をる哉
 御芽うらう出山ちりあそむ畠中の
 梅のほつ念ふ六分斗なる蛙乃のを
 又つきく鴨の子莖ちりせし折る侍る

子草をつゝ、
高きして不二とて、
足あし、
猫みよのくん、
近隣、
寄寺、
思他、
疑、

人子胡椒の粉を、
再始つゝ、
自得
或おとし、
能睡、
能忘、
能捕、

能狂 能耽 能此のあふめをせ給りて念心

吉原の初午

そつうまや賽銭をくま芝居く

はの午子ち力保りの保をかまりの

は子進子祝願了ん

いの子より習ひを免てやいあう山

奉納

金柑や冬青子あつても稲荷山

爰子より保る水久久水間寺

あ忌

人のせやあつちあつちの寺をやし

つじに舟武士ハきうのる彼岸式

授記品無有魔事

くのりりあつち彼岸乃夕日親

不生不滅のつゆを

海棠の蘄を悟進 好もん像

仏若く大晦日子入滅しあつちい子仏

くもんちあつちあつちあつちの

たえあつち生もあつちあつち

見獅子伶有感
了ふ志く如獅子無獸中思く
百とせ、ねる、茶能あてふり
無車馬喧

夕日氣町中、ふた、蜂、鳥、
蝶、く、や、猿、と、く、く、茶、能、あ、
世、茶、屑、尔、巷、城、の、く、く、
釈、茶
聖、堂、子、く、く、め、く、場、を、く、た、の、く、く、
茶、子、也、あ、り、り、障、子、の、無、孔、氣

山にちゆ乙多をこのく入日かな

画續

燕やの海まの巢城曳い、能、あり
か、く、あ、さ、ま、樹、の、さ、う、ま、妙、き、壺
川、壺、織、さ、ん、彩、く、く、く、く、く、く、
柳、燕、の、図
乙、多、の、茶、を、く、く、く、く、く、く、
海、に、く、く、く、く、く、く、く、く、
茶、の、水、ま、茶、を、く、く、く、く、
此、子、く、く、く、く、く、く、く、く、

歸る雁米つゞきも古のやあり
小田のへす 湫もさくくらぬ
市川戈牛追善一子九義のあはれ
つゞきつゞき
塗古歌の文ハあつゝや雉子の色
世の中をゆくはふしと云ふ
さゆらしたる都のく雉子の距の由
角田川牙々々
あなれも其子と尋ふ
大らやうく 雉子の母と云ふ

帆は 雁のせきりありあつて
魁や 乙女をいふ
川上を 素うき
俗を つかう
色を つかう
醜子 桃李の詩人
菓子盆 人形
緑豆の 志
垣 志

阿まをのぞきこも平梳花せん雞乃急
鷄の獅子可はくく逆毛式
順體いしる子とよむや鷄あはき
勝是とひらくく鼻の清水の那
炭の喰のあしたあぬねひ式
毛くろき子腹思きいぬを雪キヨメく
老るひきふそのやまぬ固本冊
刻く入くるく花冠も其手あき
王子曲水のりへんされく
天衣鳥帽子子尔きせん岩のい

上
十

曲水平河の事遠き茶碗のな
むろや算まるとされ宿るくえ
おほくした木兎も河の離ま
あつちまの神身以の遠とおの離
のやといやひ那平對志く小蓋
みくみくや盆月ぬをなへ松浦舟
上座るく離ちんたあこの秋なり
傳へ来くひちのたうくお地喜錢
三月四日雪ふりきふ子
雛やそ此佐野のくく乃るの袖

紙離のさうくしきとちきさうの
孫とくく物ひりたり新志の
志子孫はま宮版し系海り
いりうしめめさた
その記述はあはれかろん輝ひ子
能ゆるも其盤子たじまうけ
折菓子や井筒糸ありく能のた
り云とひきも阿のまぬ鹿の母
能記のれは清水坂一一目
ひきられぬ人をそとの棧お式

五

永代島八幡宮奉納

伊予也たひくまの達次新具
親みむ比目を臨ん伊予れ
紀国の鯛釣つれと志海ひの
貝つるや白洲未能あるま松
産をのりやうのきよく水の栗
わきうしと崔はとめかきと貝
貝めく貝とむきつる
阿のし貝むの紐うきさぬ
海まのきや原能のきさるの貝

菰湯や塩漬りらるる好くさ貝
寸たき貝雪のう候みく人々
子安貝 二見み浦を土産湯式
貝を欲人を送く物し子
蛤 世志のもさむの串を物
鉄槌 年々孔の 羸螺のかく
ゆき如 且那 吟く 夕下
東潮留 見見
出代や人おくき物も連衆あり
傀儡師 阿波の鳴戸を小うさ成

伊勢の毛髪を道傳
る糸糸糸子成まの門や 傀儡師
無踏 沾公 海庭 牙々
森崎 糸子 まのこ はん 月々 ちゅう 様
皆是代也や 鑑り乃とれた和さく
一草を礎上はと招き進
ちゅう 様 天狗 糸のひさ みるきん
いさ 片々 小町 々 婿のひさ ちゅう
猿のこ 酒をさかめく 櫻 阿那
系中へ 地金のさくく 飛 志々

仁和寺

いぢあつゝの居り木ありし様あり
ハッるせん山みさくし一沈之

雨後

さくさく生ふ日ちわきれま

はくさく狩ふも目悪め志う人せよ

妙鏡坊より花送し遣し

文ハあまの極はくし使の那

上野清水堂あり

隣りけく志うも 巻れさくし

折子殺生偷盜あり

阿の也とせよ五戒せんさくせん式

志きハくしとちあつて費もはくし

上野あり

浮助や 扈從又子ゆく様 寺

芳野山あり

明皇やさくしはくせん山あり

口ひあつて魚より汲りはくせん式

大悲心院の花と又作り

灌頂志 園より出く 様 あり

酒花さあれ子機をたけあむ入牙
下外牙漬味んせと志何さくは
墨染子鯛彼何さくいつかこちん
身成ひ子る縁ありきや系山さく
浦人の花びりらあく
らる時と斗子買ん様さくさく

花中尋友

鑄改く人ときさくつ子と山何さく
山さくく鏡並しと僧あん
やも何さく猿改くれく枝う那

上
四

石河氏宜雨云此山莊あく

二とさあのみく角豆くやさく
ひあさ子乃繪持くし山何さく
目黒松隣堂さく

浮世あれ林下子さくねる子機
小坊多や松子かきさく山さく
去るの車にさあや山何さく
卒未の巻上那子替く山何さく
くをふれて世上一時子愁眉ひと海く
其弥生さく二日おや山さく

會秀亭の芝植とてあや

植足子三切の供也 山を九

勢多春望

山はくくを泣く乃換子式
茶ありひ子此喚鐘をやま

萬日の人きありとて

一食千金とてや

此の酒乃は五あをぬはく

友猿のくをさくひまな芝とて

縁くくは志ありとて

泥坊や花ぬのけもくあまれたり

行世諾とありとて

照息子阿乃むをれとて

茶もくもくはくとて

會秀亭此山ありとて

は道習や花のあけとて

花ひひ山たのやとて

地くくひや志の介とて

讀莊子

波是ハ山嵐雪の偽とて

門柳菘を挿し折りし雪の啼
 赤白とふ丁見ありとまき菘の冬
 花見式 毎年つねに 亡目 見
 護国寺にありて遠くられん
 心をよむふたありゆく 身を堪峰
 とくれとくり 孰れとく人ともあり
 大佛膝 くのちらん ともあり
 世の花は五年 己の御ま 女 とも
 憶色甚る

上 廿四

傀儡也 鼓うのち家 意んん哉
 森あしとれと捧つとつる花の山
 花子遂く 執事ある人 都あり
 立君をとりて進む
 されありく 金よ中人をむくろも
 徳刺狂人いりしや 廿五 急子
 若きつと子く ありとく 夫婦式
 人も入ると急のこころや 花子
 庚申のふとつと 花見
 け降 又々 延き花見

日輪寺の僧と對興

花を酒 傍やもひん 垣さこのま
花の都も此くく友をちりり
かんさしやあぬゆくさのありにも

上野寺

わさう 徒士んさくく 後のさん代
油を妻つま 妻せんく 船えんれ
妓子万云命を供しく
その為子 阿くく 小 盆
毛子来く 故き幕の 此のり式

代推

彫笛 縫テ 蓑 木牙 晴をき 浮せうれ
車牙く 糸かんをみく 東屋

尋巷

植木屋 此亭主 為まこ 花いさ
あのかくと花の名 扇 扇
湖春 浅い
ほくく 短尺も あり 甚き

甫盛より 免く 上京子

花を濃 伊勢を志 へく 重衣 移

亦是らり本屋一見せん法くし哉
きり志手牙豆腐を切く捨る如き
業舟の里ハ茶搗き水きり
ふ菰と酢みそ子つふ粟下那

画賛

菰新茶の事まろく酢の味あり
ふち咲く松魚らふ日をかき
水氣や鮓こころふ姉まの
錦あまふ菰あ風ハ憎か
らと子みねるの五徳やふら

秋航庭を中せし子

たそこの事や菰うるふ扇
ころは二浦と侍遊なる京使子
そまらふ以祝く

菰浪や廿七人 子履と

うらうら二かき何鳴江の星乃教
ちんし引蝦子あふたあ

市間喧

つき本屋の手あはる足形く雨蛙
景改ら片目哉あふ田螺あ那

ありんかの子のふをきかき
 しつりやまらひ子あつ蜂之助
 床の増の巢かきし弦子
 なごさけのさくら三八宿とこそ
 何必逃杯走似雲
 けねたたこく遊をも少架式
 龍樹の舎産の禅陀伽王に討しる貪
 欲とまめしああ事りへん有瘡
 一人迅猛煙始雖悦後増苦の文の心を
 存瘡のいひれた時えし寺法つれ

摩訶止觀中一日之羅不能得鳥得鳥
 之羅唯是一日けふのく海鏡
 多きとり急はしりり乃ゆえ哉
 南村千調仙考へか魚乳子
 外書如猿口と破島能つき純具
 三月尽
 考ふあ紫く春我送れ牙公重や

夏二部

凡光前我苦吟身

大酒前あきいそまけうき裕あふ
一とらち子裕子あふや思ふう
越後屋尔結うき喜や更志
卯月卯母子あふ神

身あふりき衣うき
めあふやら子子観考こ流も
は神も志うの下あふ如更衣

寄甘巳

首禿もあふ向ううき
奉幣使あ代春の人ああ

あふしにきて伊勢あえ誰う更衣
乞食哉大地とあうき夏うきも
あふあふああやああああも新
有あああ面起きやあああ
あああやああああの子規
あああ星ああああああああ
あああや下馬のああああああ

川越うい誰屋あへり
鶴啼ゆこの阿のまを子
あうまの氷るとはまの郭
百間長をめぐ
時を人死つゝ見え下る打
りゆくはす一二の橋を
院感々意味線志くし
亦打山
おとせけ釋多う太鼓
き慈くしの用意心月年
杜宇
鶴

寮坊主のりゆと淋し
宰府奉納
車とくたする疾くと越尔り
林中不賣薪
世子なくや山母さきん町
禁寺五加り行くはゆく
さうはとらふ村也
くぬ山林場の日暮や子規
曲終人不見
あふ川まの反吐とどけり
杜宇

目の上牙目をかく入也 郭公

夢昼

砂目子 寐是浅阿人 弓魂

姉崎の野 夫也存心ときき

めされく縁をあらうと家ゆく

起きけあの時多 市を来記

物く交す二あめりハ出馬くれ

阿方くあく 蝶くらふほく記寺

寺と守る本 寺中鬼ありし子記

山田市之悪

ちのくしと海を流る如 杜宇

親きく耳を叩き世をほくきん

我白大志くは 歌と吟くものハ 籠

証かんく 籠破時多 子記戸子

阿連くしと 籠ありて子記

阿のくしと 啼きくし一と念を

郭公 中入ありて 籠

さゆくさふ本 鬼くしと 時 鳥

次方めく

母く記を 籠ありて 浦水記

屏風子菴房の位すの家の系
送ひ子此之位をあり 郭公
子此居や火子神者を隠者鳥
上行寺 二日
灌佛や 拾子別 寺の兒
信仏や 墓子起る人を知る
佛子人の心をさるるに
志くくやと生れ出さるん
麦飯や 母年たうせく 仏造と云
神の志や 一蓮の市所乃加茂詣

正三十四

う乃花や 蛸く山 悲乃の之
蟾とあんと 神の心を
年重く 一蓮の市所乃加茂詣
舟より均く 吹や夕 若葉
慈母墓
系水年くくくく 茂葉那
僧正 此書と云ひん 楓
心か するのなる 乃くこの牡丹持
河州 観心寺
楠の 鑑ぬるをく 保さん哉

うかき女や異見子涙む夕牡丹

筑前記を

志々ぬ火煮繞りうつ牡丹乳

丹羽丸意かゝのとの糸糸を

黒牡丹糸やぬり世の大鳥糸

艶七子めく

ハ専哉うつて并笑ふ牡丹の香

あつさぬや驪山をぬめし涼ん子

宵柏の行状とあつ免し集編る人子

はくもじ角子火を免す深見州

殿つくり並くやう桐花を琳

江毛未貢乃出き奇遊りう

桐の系新後の鷲鶴毛の山を

く日子かきぬ浄瑠璃屋や青の康

入下洛郊月の中乃一日

隈波屋のかみりんを如き鏡山

帆とあらぬ舟を松魚を磯かき

鏡花の心臨る己日のまきあつ

夕志ややあつる糸あつ中あつ

こころきれぬを昔あつうつて

和重御子

伊勢あとも 松魚なるも 酒迎

たのこねまのこねま

うゝ藤の葉子みくゝる 鯉うま

あ鯉の卵ま中死ぬまの死

人のまゝくす河新しかかつを

魚市涼宵

指まぬの夜も清くは松魚

光廣卿のあまをのあま合作り

松魚うま先まぬ若を袖く拭

木質

名所は海にえんくく松魚那

袖裏や茹くをけず白く李

浅野お義士等をこぼ

沢沼の池を引たりあまつら

杜のあまを水き 土のあまを

あまのつら女雪法師かこ

ひのあまの珠もありけり杜

屋まける子 松魚あまのま

護国寺ふゆ

水漬子 ちろこころぬとや 杜若

奉納

のう衣は氣や 加きくゝあきゆき
あしは花 朝精進の 湖色うき
あふさうい 風もたのしみもこの花
芥子のうけとちりつ 臨ん 頂汝いふ

祝産育

たうちの皮すい 胎の 孫つこころり
筆よ 糸より おくよ 犬あし
筆や 丈山あしせん 鏡の 鞘

大町亭法會

法のさめ 筍羹 四由 加こころり 式

寄幻呼長老

老僧せん 筍 どのむ ちのみと式
ころの 糸や 鞭牙 けろぬろ 箱根山
志ちのひらる 法隊の 梅下りうき

く免つろ川 羽伽の 折あふよ 玉あられ
傾城せん 友を 居あしや けりあの中
帯へ 合相のろしや 浮世 夏とをい
みくおや 新白ま川 するの 鏡谷の 赤

形も赤糸未糸のうろろ子の如く
懺の川長者の如く 思牡丹
瘡瘻の如くはけり 牙垢あり
若阿也免 懺の如く 嵐子如
公門亦入時
あや免くく 明の障子の如く
銭湯を浴びて 糸阿也免
うろろもあや免も言からぬ子
と伊勢大踊家の志ふに
葛了と蛙免つる牙 あや免の如

本つゝ 由よ屋を志めく 葛の如
きり手えあや免く 思あや免
根合や 花 花 花

廻文

けきたんしの免や 葛乃 富田酒
此友や 車をかき 白髭太郎との
あや免りし 免の如く 人形
こゝろに 小糸未糸の如く 人形
我の如く 切金方夫や 若阿也免
蝙蝠 鼠 屎も子になれ あや免

屋根あきしあふんく昔る 當り船
粽うん 譯もさめきり 終のあり
ちまきゆふとらしむ 昔の 葉か解せ
おちまきつる女乃 塔はまへて矢うくもた
山無の 粽やき先く 流なくとも
くらの戸や 山乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
午の逢午の月尔の口午の始けり入
競馬 塔牙入 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
いりりひま 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
ささく 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃

五月雨尔やのく吉野を 出ぬか
之 詠や 藤衣りくくむ ぬらうも
隅子 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 五月 雨
ささく 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
燕も 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
新ぬく 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
呈 露 江 公 餞
等 木 や 人 馬 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 五月 雨
冠 江 戸 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃
住 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 乃乃 五月

何れや湯の桶外山糸より見
五月の雨のころは後春の
第一の礼は立
まゝ毎やうかたにつれ 小人形
さみくれや酒匂くくする 和菓子
嚴密院の大法師をねとす
五月の雨はあつてもむら 法の
七十餘の老僧もあつて
こそりく位まゝ 早に退善の
をふらの老醫のいふ
えきまぬめい守表もあつて

志く古来稀なる年た
とがくゆいけい
六尺もしらのあや
五月雨

いのみ

微雨の窟を以て一曲
何れや五月の雨
舞板や五月の雨
糸の尻を打つて
るやあ 行も 酔
下書や 埴根
五月雨

腰越

篠すのまゝ厨斗と母森のみろく哉
傾廓

ハ云未也たのふあるまの虎々雨
けふの山くしるは何と閑古き
風あめ表云志何くやあまこる

僧正々谷

侘しらけ具如く傍まらんこを

自愧

おあまをと母森さうきる水雞代

水雞啼 新まふ遊女のつぎめ哉

和古詩

琴弦焼く水雞を煮夜酒淋し
吐ぬ鶉のほむら子め取 舞う那
移すつれて一里ハ来さう 思の松
石燈籠や子供の母くうあひ哉
杜國張ひさむ

羽あまのき時きうらうらとこ
あまの人此の世あま

内川や雉のうまの葉子ぬく蛙

新白子七里を歩くり必古屋館
その枕子館也所り多ふくの茶屋
永代島の茶店子やふりして
明ふり神崎とも進く館の蓋
湖舟銭子酒たうて
貫之の館のすくふわりの乳也
飯館乃豊なるふしやみやこ
岩根こそ鞋子饅あり走鯨
志くくく通くた
それ中込志くんあしこく小蘇賣

更ふ海と四ツ手尔いな乃光の那
日通りの園せん扱や 築ふさあひ
友川子茶葉とら仕出たの麦子ぶ
枇杷の葉もやそれく角あきの 蝸牛
辛くぬ 鬼の耳や 果くくふり
くはかり 酒乃さくのれ子 這きくり
漁倉や野ふし 虫角出 蝸牛
文七子 ぬまふちを危のくくあり
串花免てぬ 赤尔生くく 蝸牛
字の戸子ふあき 葉多くふ 堂このれ

宇治めく二百

葉のふりあつておのれを
川くさや水子二重にほく
重志のふりあつておのれ
妾のあつておのれ小女告やいん

二まのふり

此碑のハ江波哀まぬ
松はくさ子まは浮橋のふり

愛娘子

鶴啼く玉子まふ松のふり

二

鳥山へ松のむく人子

青柳のほろむく人子

市井飯屋のふり

皆つくり其果うの松やいん

松のふり松帳のふり

松賀秋帆山石峰へ松

松のふり松箱のふり

松のふり松箱のふり

松のふり松箱のふり

松のふり松箱のふり

酔く忘

宵の蚊も枕をくぐりぬ 八夢う乳

生死未未

鳥の蚊もくぐりぬ 夢のく急

捕虎東坡

七ツ毛の蚊もくぐりぬ 足疾鬼

あやりの火や蚊帳つらうとよ老ひり

蚊にやぐや麩衣ぬ 困る 私語

佛骨表

志つらうとよ蚊とあきり 韓退之

射者中リ 奕者勝ッ

蠅およつと進ふあは海難うと海

伝信のまわくくく人死獅子

梁の蠅はあくくくくくくくく

蠅なくハ一糸をくくく 甘き花菊

去る人何事くくくくくく

蠅追ふ身妹くくくくくく 瓜作り

西雀く矢數俳諧は後見たのくくく

漢子あくく二万句は蠅ああまけり

不二のる蠅ハ 酒吞子のくくく

逐歐陽公賦

蠅の子孫兄子孫弟あつて皆さか

いひけりともちをたれしとてさあそ

きうけつる愛をばしうを虫の法

取きつるのりきりかき、空入能也り

緑槐高處

さへ蟬や 笛平 帝法十文字

一品の宿坊あり

日蓮よ 木すゑる系 蟬の鳴きを記す

空蟬子 吉原ともれ、訴詔あり

木を畫くとあるを記す

蟬ときけ一日鳴く ありてあ

入湯の人木笑然のりし系

蟬のあまし死もあつたけりれ

きくおくや木の回りあつる園に中

あ打也 蟬も 花をぬくや

銀子を懐紙の表帟あつて長名

あせせられ

飯糰 牙加多もたつぬ、蟬の光

視波蟬、貧者 牙夜をぬくや

百言の茶をききぬさねはうつあきぬ
増卿の小野くきいづし車百合
み彩買や朝のくきと夕日新

望相員

あつらひの茶あつらひの海あり日々思ふ
ひらくぬや福の糸目子たちむねのふ
ふをふとふ高年まの門 價う那

祐天和尚子やよ

夕白の年海をききとかきと賣名号
ゆきのぬやふきの雞 坂根より

画子影守

夕のぬや一白のとあ 茶は宿

酒満

昔は多々の酒典きき子も 二面
藤のぬや金魚の年あつらひの藤

遊女小笠とつる勢を讚らふあつらひ

もれいぬや弦子あつらひけくきとあつらひ
藤のぬや海老越と袖はさるる

茂叔賛

傘は蝶 蓮は立巻ふは 桂の那

瓜の一花

この瓜は子許あやま川く 瓜持糸
あつらひは茶葉乃まかり 瓜の垢
あつらひは 硝子なかりげさ六皮す
おれは又 泣かじ 志の葉らり
あつらひは 瓜の志つらり
瓜の皮おえくもて身 流連らり
酒をまじり 瓜買有ゆ 袖もく乳
龜毛子銭
うりの皮は立身、重しとかさよき梨

冠のやうに法保くちあへ下はえ
さき種はさあつれ 髪保くち何某
のりやうりいふさ記ぬもさうけ
糸きよも食養生やうりさけ
瓜やや 桂乃生 油ぬきくさり
干 瓜やあつらひ志くも思ふ白
布 瓜やあつらひ志くも思ふ小舟

豊年

あつらひは 牙あつらひは 瓜菓子
川 礼あつらひは 瓜菓子

四鉢平 勢多の 湫 ありきや 心 左
 手こころふも 林檎、油ておのし
 百日のあくら 悪しや阿のり
 百姓の志向る あらけり 一葉 酒
 酔登二階
 酒の瀑布 六麦の九天より 落るん
 匂やけきやううと 此下り 不たて
 會盟
 交りのさきんて 亦あり 夏料理
 手子かろく 葵 摺 小 木 志 下 那

止波浦めく
 地引すと 誓のまきよく 暮れ 此
 野焼を ゆる 金鼓と ね 昔 衆の 此
 去月の みのり くら 良月
 笛 木子 昔 子 くら あり 夕 金 那
 昔 生を 委 へ くら あり 夕 金 那
 樟 脳 牙 代 紙 あり 紫 小 鏡 くら 龍
 ろめり くら あり 夕 金 那
 捨 大 也 木 子 子 余 くら あり 去 月 子
 う くら あり 夕 金 那 去 月 子

舟中喟

さくろよしの筑波崎出く里急き
夕たらしむ法華の巻こむ阿の巻
ゆつらむ洗ひかゝる土井の色
白雨牙独活の巻ひら支白う那
夕ちやむのやせん坂との海へは
海芽の巻子阿の巻く晴るる
ふもや巻くらひさきい 子に原
ゆつらむや樂を張あふ家傀儡師
夕たらしむ阿をめぐりて子晴るる

八雲の川あふの嶮嶮な 雲うた
橋挽きこく紙はあすや雨うの峰

高閣挽涼

香薫散た、紅の川く雨うの峯
西行く武蔵坊下りて法華の巻
めんあくの端は 法華の巻を
阿の大大なるぬくる巻を
割く蓋をくくたに白紙の巻

志も川くけ李白う面平かあり
昔はあの子命と法華の巻

元角田川牛田と云ふ所ありて
 清き水ありけりしに
 井もかきけりて
 清き水ありけりしに
 霧はたか能く
 日さやけりて
 世にありて
 ひたりすむ友も
 清き水ありけりしに
 此論を一荷す
 水あり

五十一

山差我の寺の
 紙園殿のかり
 杉乃葉の青
 里れ子を教
 乳の先し
 七日
 絆ふあのお
 山王氏子
 系も書ま
 天下系や

番付と書もまつりみきやひれ
松原年 田舎り此りや登休と
瓜むいそ粗平くふさるあつさ
草の繁の未罽をかろ一暑一のれ
かたらくらみく
山銭り歌せん痛の阿向さ
蠟うけの標丁あらし一星ハ小
小女乃等子ころろ歌あつさ
冠里云備中松山初入の時
川と暑や浦の昔屋子軸うり

借丸前々持し扇子
朝比奈の楽屋へ入しあつさ
むくはぬ乃木絨平さ海る暑うれ
呈而踏江公銭
供あさの鞘能あつさや世せん松
并暑し一呪りさの歌く園の歌
身あさむ一重羽織も浮せう那
何し羽織縮緬ハ重し紗と袴
昼さうらみく
うく麻也ふりはめさ麻改巾

抱菴や新あかくえくはのよきよ
 曲水の旅宿は湖水をありふりゆく
 連やあめと表波にわたり
 うきをのく風情は身なる雲霞は
 紅下ろちる乃あけの白ひく赤
 小町の賛
 腰あけく体むちるへ支大團扇
 破扇の圖
 維光の後架へのちし扇なる
 鳥飛 紺衣あきさ 弦あつさ

あけ粉子風の垣ある扇一の形
 ある所方より葦あきく扇子
 さんせあしあるに
 新魚やあめと表波にわたり
 うきをのく風情は身なる雲霞は
 弦あきく扇子賛のそませあ
 涼風やと市をまあく女形
 序令はく先く上系子舞
 涼くまきく新魚は連し金
 すくし舟泥ぬりあは 遊あち子

牛御前

是やしの雨を中人下りて

銭久松肅山

筆をさしはるるやかろき下涼

人死子をめく

涼しくはるるはるるをこれめん

画賛

大虚すしし布袋の持せぬゆく所

日枝もむあひあふ夜神と

十八の神つる月すし美人の

河原あそび

曉は牛さんをもえ 車一の那

この松牙あそび風あり庭涼と

勘あぬ月あそびありし涼と

人子まこ暑あそびありし涼と

自棄

たろそめを新起ひるも夕すし

上下と裸のり夜あそびと

解をとりくちあそび

うまあそびのまじりて中へ

と船を乗るの一句は扇子のとくは籠
生れ松ありてこととす

本舟路くは涼しし美味を志すれり
祇公日次の影をとりてはるを

河美垣 徳利ゆゑにすす侍あり
遠浦の穽船押あがりしこ

櫓のこゝよ入

帆波あつて帆をひききや草を風
夏後やあつていふふの柄抄
子代肩とてつとくむさ 夏 早

青流亡妻をいひて

園女とてこれや此は夏夜の海

夏瘦子 能目志ありも小食あり

葦舟舟船くや 六月 郭 乙

菴の留守

すひつとくことおふ夏夜の 岸 俵

隣家子樹とてく人ありその四時先

故とてさる事とて守

何ういふん 六月 相波うゑれ人

谷木^{ウツホ} 鬼をわく物とてさる

谷
市中の光陰はとととに
秋のふんはととと太鼓や
秋のふんはととと太鼓や
秋のふんはととと太鼓や

御後

夏秋 法師の宿札きり

大雨大風

吹降せんと台羽手
吹降せんと台羽手
吹降せんと台羽手

夏秋の宿札きり
夏秋の宿札きり
夏秋の宿札きり

王
大正

西月
西月
西月

新歌

